平成18年4月15日発行　第37巻第4号　毎月1回15日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊

地域保健

●FACE2006
平野かよ子さん
国立保健医療科学院公衆衛生看護部長

●特集
認知症の早期発見とフォロー

●首長に聞く
宮本勝彬市長（熊本県水俣市）

●あなたのまちのヘルスプロモーション
山梨県北杜市

●訪問を考える
子どもに自分を投影する虐待ママを救う

●介護予防フロンティア
認知症予防・支援

2006.4

顔 FACE 2006

平野かよ子さん

国立保健医療科学院　公衆衛生看護部長

言葉では伝えられない「保健師道」を大切にしたいと思います。

photo:Sei Kamiyasu

かつて厚生省で保健指導官を務め、今は国立保健医療科学院の公衆衛生看護部長の職にある平野かよ子さん。現在の保健師の置かれた状況について、どんな思いを抱いておられるのかを率直に伺いました。

ひらの・かよこ
聖路加看護大学卒業後社会科学系の大学院で学ぶ。病院看護、訪問看護を経験した後、都道府県保健所保健師の実践を積み、看護大学にて公衆衛生看護の科目を担当。その後、国立公衆衛生院（現国立保健医療科学院）にて保健師の実践活動方法の教育・研修と実践研究を行い現在に至る。この間厚生省にて保健師行政にかかわった。

自分は本当に何をしたいのか

―将来的には健診後の保健指導は保険者を中心に行うと言われています。従来の保健師活動に大きな変化が起こりそうですが、その点についてどうお考えですか。

保健師は常に時代の変化に柔軟に対応して活動してきたと言われています。しかしこれは裏返せば時代が移り変わっても貫くものを持ち得たのかが問われるわけです。女性のほかの職業集団を見ると、「私たちはこうしたい」というように、職域やパワーを拡大してきていますが、保健師の場合は公的機関に所属していたせいか、自分たちの仕事の領域を主張し、勝ち取ってきた歴史は少ないと思います。

一方でこれまで手立てが明らかでない健康問題に、本当に苦労しながら取り組み、それを保健活動にしてきたと思います。しかし、これからは、「保健師でもある私は何をしたいのか」ということに、少しエネルギーを割く必要がありそうです。

将来的には、生活習慣病の保健指導は保険者を中心に行うということですが、これは行政の保健師にとって、「本当に自分たちはどうしたいのか」が問われているのだとも言えます。極端なことを言えば、自分のやりたいこと、すべきことをするためには、今居る職場にこだわらずに、民間であっても「ここぞ」と思うところで働いてもいいわけです。行政保健師の危機ということは言葉を換えれば、保健師の職能としての自立という課題が浮き彫りになったということかもしれません。

それを踏まえた上で、保健師が医療費削減にまい進する意思決定をするの

特集

認知症の早期発見とフォロー

超高齢社会の訪れとともに認知症が大きな社会問題となっています。2002年に施行された改正道路交通法では、運転免許取り消しの要件として認知症（当時は痴呆）が規定されました。昨年の4月からは、厚生労働省が「認知症を知り地域をつくる10カ年計画」をスタートさせています。介護予防においても認知症は重要なテーマ。保健師は認知症の啓蒙・教育、地域での支援体制づくりの面で活躍が期待されています。特集では最新の知見と各地の先進的な取り組み事例などを紹介します。

illustration：Fukiko Yamamoto

p8-12 最新知見

認知症の解明は飛躍的に進んでいる

朝田 隆 さん【筑波大学臨床医学系精神医学教授】

p13-23 Report

周防大島町における認知症対策

「もの忘れ健診システム」までの歩みとこれから

【取材・文】三重野由紀子

p24-32 Report

近江八幡市における認知症の普及啓発の取り組み

「地域で暮らすために」の視点を持ち続けて

【取材・文】三重野由紀子

p33-35 Report

認知症の妻を支えて

二人暮らしを続けるために必要なものとは

【取材・文】三重野由紀子

特集

認知症の早期発見とフォロー

最新知見

認知症の解明は飛躍的に進んでいる

朝田　隆さん
筑波大学臨床医学系
精神医学教授

高齢者では5歳刻みに倍増

認知症とは、いったん正常に発達した知的機能が後天的に、原則として持続的に低下し、複数の認知障害があるため社会生活に支障をきたすようになった状態をいいます。

認知機能障害特有の症状として記憶障害、失語・失行・失認、遂行機能障害などがありますが、そのほかにも注意・言語・推論・視空間機能の障害や、判断・思考・問題解決の障害などが見られます。

また、周辺症状として、暴言・暴力、睡眠覚醒障害、徘徊、不潔行為、抑うつなどの症状が現れることがあります。

認知症の基礎疾患は表1のようにさまざまなものがありますが、そのうちの4分の3以上をアルツハイマー型認知症と脳血管性認知症で占めていると考えられます。

年齢別の認知症出現率を見ると、65～69歳で1・5％、70～74歳で3・6％、75～79歳で7・1％とほぼ5歳ごとに倍増しています（図1）。

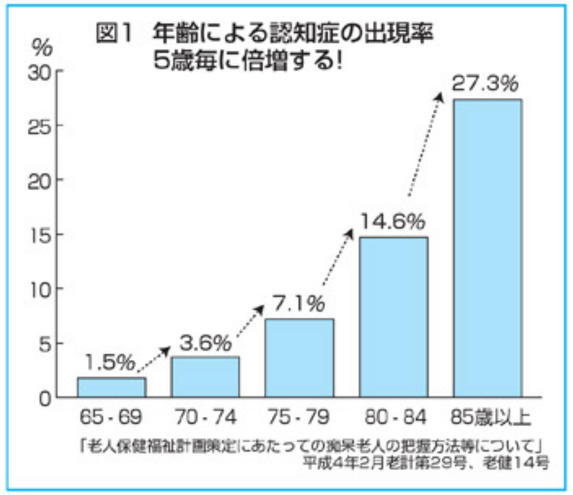

表1　代表的な認知症性疾患

- 進行する
  - アルツハイマー型認知症
  - レビー小体型認知症
  - ピック病、前頭側頭型認知症
- 発症・進行を予防できる
  - 血管性認知症
- 治療により改善する
  - 進行麻痺
  - 正常圧水頭症
  - 慢性硬膜下血腫
  - ウエルニッケ脳症

「人格が消えていく」アルツハイマー型認知症

アルツハイマー型認知症では、脳にアミロイド・ベータ蛋白を主成分とする老人斑が現れ、神経原線維変化や神経細胞の脱落が見られます。進行すると脳はどんどん萎縮してきます。人格も知性も、まるで消しゴムで消したように、すっかりなくなるのが特徴です。最後は寝たきりになりますが、体の機能は比較的よく保たれます。

比較的初期の段階で記憶の3段階である記銘・保持・想起がうまくいかなり、電話を切った後で今の話の内容が思い出せなくなったり、電車に乗った後で目的地を忘れたり、駐車場のどの位置に車を停めたか思い出せなくなったりします。また方向感覚が悪くなる、身だしなみが乱れるなど、失認や失行が認められることもあります。また女性の場合には、同じものを何度も買ったり、料理が単純になる、メニューが少なくなるなどの徴候が見られます。その他、うつ状態やおどおどした態度など、感情面の異常から始まることもあります。このように、アルツハイマー型認知症の訴えは、記憶障害だけではないことに留意する必要があります。

脳血管性認知症は脳出血、脳梗塞などが原因で、損傷が生じた部位に障害が現れます。全般的に人格・知能が失われることは少なく、「まだら状痴呆」と言われるように、部分的に認知症の症状が現れます。アルツハイマーとは違い、体の機能障害をともないがちです。認知症と症状が似ているものに、意識

Public Health●Interview

首長に聞く

●連載 第4回

日本版パブリックヘルスを求めて

熊本県水俣市
宮本勝彬 市長

インタビュー・文
荘田智彦
（ノンフィクション作家）

photo：Sei Kamiyasu

はじめに

「ノーモアヒロシマ・ノーモアミナマタ」の声が、市民の良識としてまだ広く世にあったあのころ、70年代の初め、私がフリーの記者を目指すきっかけになったのも、広島の原爆被爆者であり、水俣病やカネミ油症の患者被害者の熱い取材からでした。後年、「保健婦」の取材をするようになり、あれだけ通い詰めた広島や水俣、北九州の患者被害者のところで一度も「保健婦（師）」なる人に出会わなかったのはなぜだったかと不思議に思ったものです。その原因は端的にいえば、ＰＨＮ（公衆衛生看護）の技術職としての専門性の未確立と「行政保健師」としての使命、そもそも自分たちは誰のために働くのかという根本の問題が未整理だったことが、国家や行政責任が問われるような公害、薬害のような社会問題には、本来の「看護職」という役割さえ十分には果たせて来なかったという歴史的限界があったのだと思います。

今回、ぜひとも公害水俣病の原点、熊本県水俣市長を訪ねたいと思ったのは、水俣病公式発見から50年の年に当たる節目でもあり、市民こぞってゴミの分別回収など環境モデル都市として必死に生まれ変わろうとしている水俣の現状を知りたいと思ったこと。そこへ降ってわいた巨大な産業廃棄物処分場計画、中立の立場を崩さなかった40歳の前市長と、設置反対を鮮明にして市長選に敢然と立ち上がった61歳の現職教育長の戦い。水俣市民の選択の結果は劇的な大差で新市長の誕生（2月6日）でした。然るに、地元紙をのぞけばこうした重要な意味を持つ選挙の報道さえほとんどの全国紙はしていません。

これも「風化」なのでしょうか、世間的には「ノーモアミナマタ」はおろか、「公害病」という言葉さえほとんど聞かなくなりました。私たちは、この機会にもう一度、パブリックヘルスの観点から、新市長のマニフェストにあった「水俣の将来は、水俣病の教訓に学ぶことに始まる」という主張に耳を傾けたいと思います。なぜなら、「水俣の将来」は「日本の将来」と置き換えても少しもおかしくない、一地方都市の健康被害の問題ではなかったはずだからです。あわせて縦割り保健事業の現状にも触れたいと思います。

生命・健康・環境・人権にこだわり、まちづくりを進める。

熊本県水俣市

宮本勝彬 市長

宮本勝彬(みやもと・かつあき)
1943年熊本市生まれ。東洋大学卒業後、65年水俣第二中学校に国語担当として初任。以後38年間水俣に暮らす。水俣を愛する一人であり、水俣が心の故郷。趣味は野球、釣り、読書、書道。好きな言葉は「人事を尽くして天命を待つ」。

水俣病に負けない子どもを育てたい

「公害水俣の市長」の話を聞きたいというのはこの「首長インタビュー」の企画が立った当初から念頭にあったことでした。それは〝日本版パブリックヘルス（公衆衛生＋住民主体）を求めて〟では避けて通れない歴史的課題だと思っていたからです。インタビューの折衝は昨秋から始めましたが、この会見が成立するにはいくつもの幸運が重なりました。

まず、取材の目的を伝え打診のための一報を入れた市の健康推進課で、最初に応対してくれた係長が、偶然にも旧知の山科智美保健師だったことです。彼女は10年前、『保健婦（「普通」を守る仕事の難しさ）』の取材で水俣病発症当時の保健婦活動について貴重な証言を頂いた、当時の水俣保健所山科なつえ婦長の娘さんで、ご高齢の元婦長と同僚の菊川ジツ保健婦の取材会見に同席してお世話頂いたその人だったのです。もう一つの幸運は選挙の結果、会見相手が公害水俣の地に起こっている巨大産廃場計画に中立の姿勢を崩さない40歳の若い江口前市長にかわって、はっきり反対を表明して戦った宮本市長が